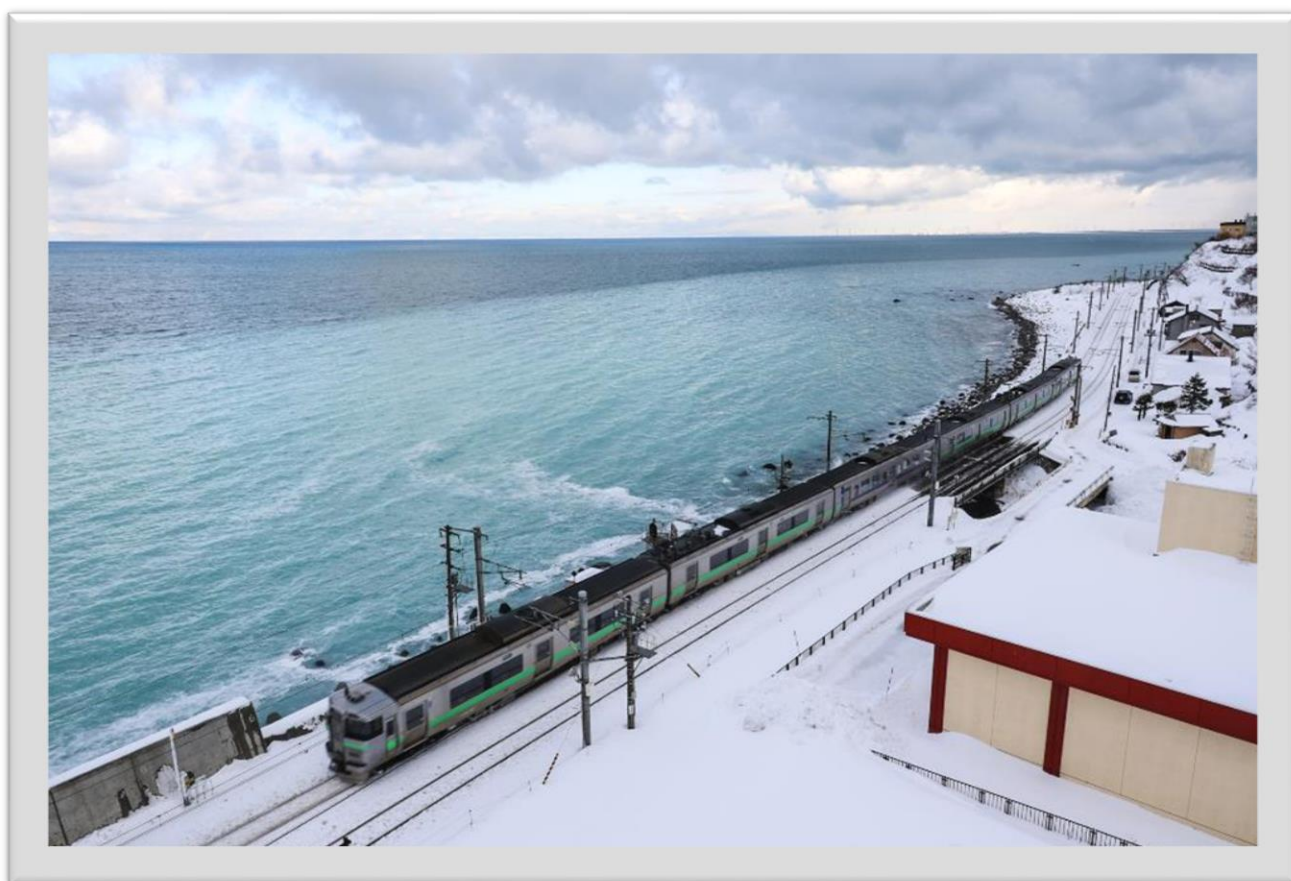


小樽市の漁業 (令和6年版)



朝里海岸で確認されたニシンの群衆ぐんしゆ

目 次

1	漁業の概要	1
2	小樽市の漁港	2
3	漁業権区域	3
	(1) 漁業権の定義	4
4	漁業生産状況	5
	(1) 漁獲量及び漁獲金額等の状況	5
	(2) 主な漁業種類の生産状況	8
	1) 沖合底びき漁業	8
	2) サケ定置網漁業	9
	3) ニシン刺し網漁業	10
	4) ホタテ養殖漁業	11
	5) ナマコ漁業	12
	6) シャコ漁業	12
	7) 採介藻漁業	13
5	漁業協同組合概要	15
	(1) 漁協組合員数	16
	(2) 漁船隻数	17
	(3) 漁業種類別経営体数	18
	(4) 漁獲金額別経営体数	19
	(5) 年齢別漁業就業者数	20
	(6) 安全操業対策	21

1 漁業の概要

小樽市は、北海道の日本海側中央部に位置し、68.62km（銭函～蘭島）の海岸線を有しています。海岸の形状も、砂地海岸や岩礁地帯、転石海岸と変化に富んでおり、魚介類の種類も多く、小樽で漁獲される魚介類は約 40 種類で、令和6年の漁獲量は約 2.2 万トン、漁獲金額は約 40 億円となっています。

小樽の沿岸漁業は、江戸時代から行われたニシン漁を主体に栄えてきましたが、昭和 29 年の群来を境にニシン漁が衰退し、その後は刺網・エビ簞・沖合底びき・延縄等の漁船漁業を主体に発展してきました。

昭和 52 年に 200 海里水域が設定され国際漁業規制が年々強化されることにもない、沖合底びき漁業の縮小を余儀なくされ、その後、採介藻漁業・ホタテ養殖漁業に力を注ぎ現在に至っています。

近年では水産資源の減少から、つくり育てる漁業・資源管理型漁業を推進し、ニシン、ヒラメ、サケ、マスの稚魚、アワビ、ウニの種苗の放流やホタテの養殖、ナマコの種苗生産事業、藻場の磯焼け対策などに取り組んでいます。

ニシンについては、平成 15 年から稚魚の放流を続け、平成 21 年に漁獲量が急増したことから、放流の成果であると考えられます。ナマコの種苗生産については、これまでの試験・研究の結果を生かした、本格的な種苗生産の実施を目指しています。

また、藻場の磯焼け対策として、ウニの移植やモニタリング調査を実施し藻場の保全に努め、コンブなどの生物量の増加が確認されています。

小樽で水揚げされる水産物は、卸売市場で「せり」にかけられ、仲卸売業者を通して小売店に届けられます。

小樽市には、「小樽市公設水産地方卸売市場」と「小樽市漁業協同組合地方卸売市場」の2つの地方卸売市場があります。令和6年は約 40 億円（地元 39 億円、移入 0.6 億円）の取扱いとなっています。

2 小樽市の漁港

小樽市には、第1種漁港として祝津、塩谷、忍路の3漁港があり、重要港湾である小樽港に高島漁港区があります。また、銭函、張碓、朝里、船浜、文庫歌、桃内、蘭島に船揚場があります。(図-1)

祝津漁港(副港)は、許可を受けたディンギーヨットの使用が可能となっています。

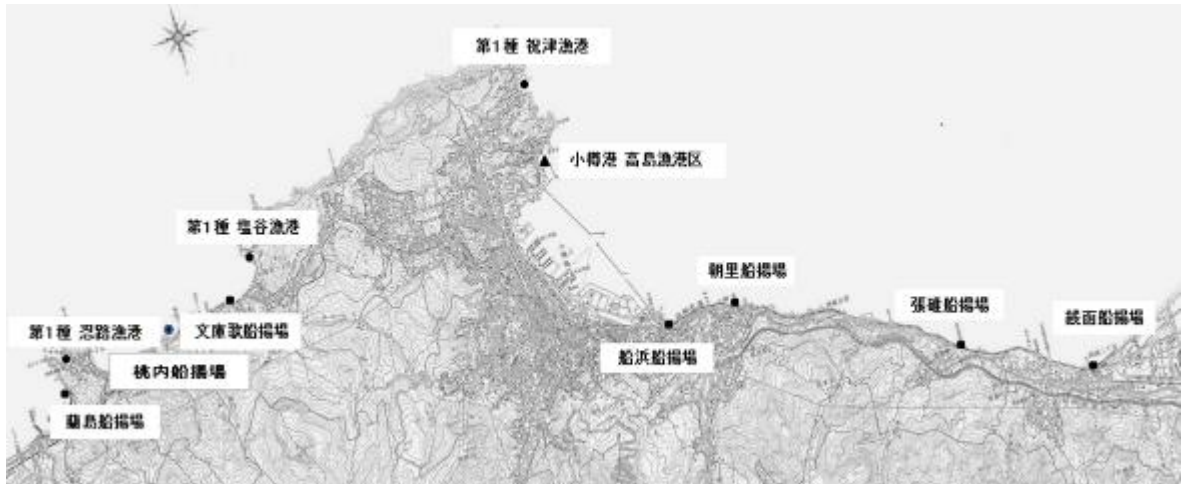


図-1 小樽市の漁港等位置

※) 漁港の種類

- | | |
|---------|-------------------------------------|
| 第1種漁港 | : その利用範囲が地元の漁船を主とするもの |
| 第2種漁港 | : その利用範囲が第1種漁港よりも広く、第3種漁港に属しないもの |
| 第3種漁港 | : その利用範囲が全国的なもの |
| 第4種漁港 | : 離島その他辺地にあつて漁場の開発又は漁船の避難上特に必要なもの |
| 特定第3種漁港 | : 第3種漁港のうち水産業の振興上特に重要であるとして政令で定めるもの |

○祝津漁港(第1種漁港 昭和26年10月17日指定)

- 管理者 : 北海道(昭和30年4月14日告示)
主な漁業 : ホタテ養殖、刺し網、定置、タコ縄、ウニ・アワビなどの採介藻漁業
水揚量 : 1,793トン
水揚金額 : 8.1億円
登録漁船数 : 43隻
PB許可隻数 : 98隻

○塩谷漁港(第1種漁港 昭和27年10月6日指定)

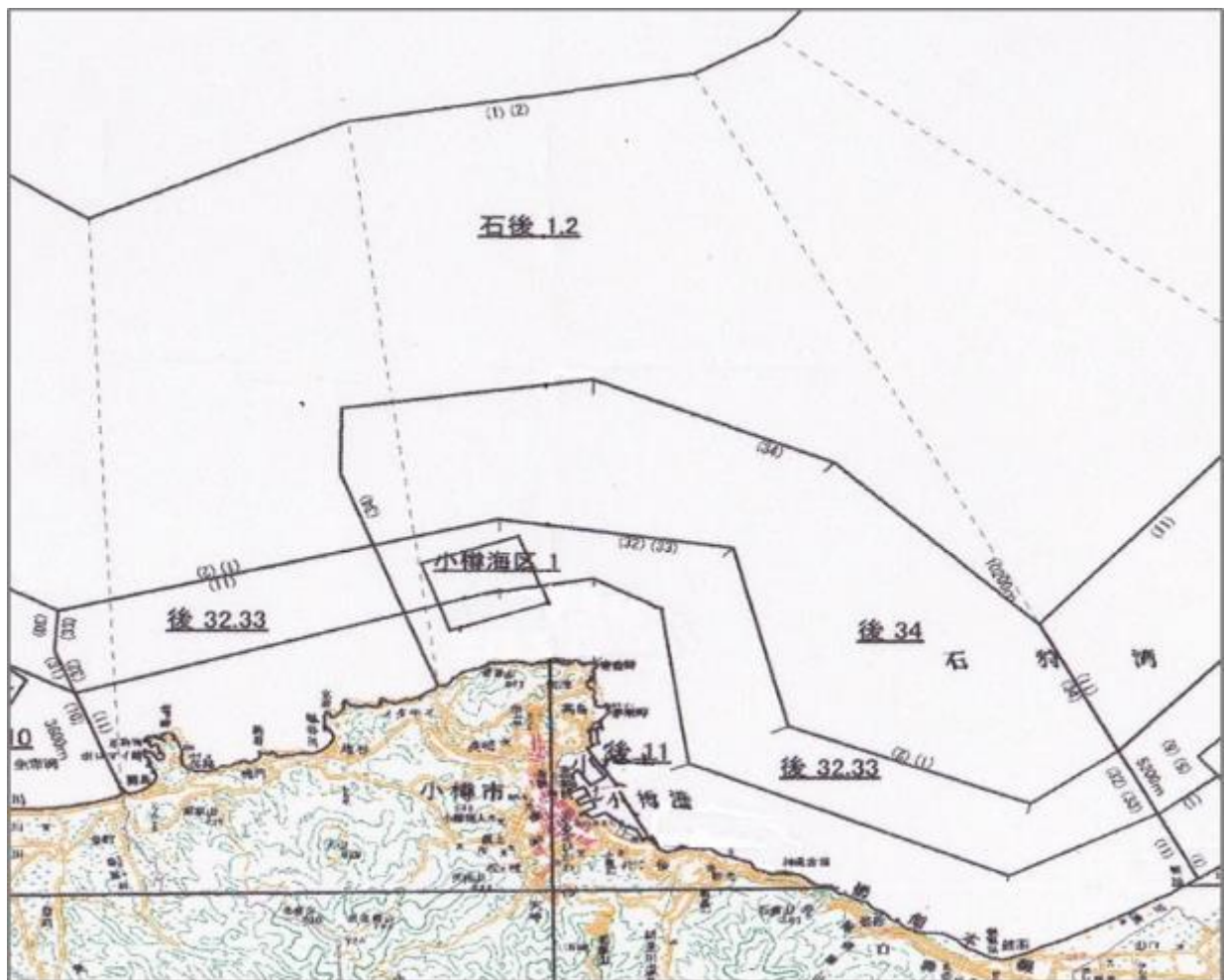
- 管理者 : 北海道(昭和30年4月14日告示)
主な漁業 : 刺し網、定置、タコ縄、ウニ・アワビなどの採介藻漁業
水揚量 : 146トン
水揚金額 : 1.6億円
登録漁船数 : 32隻
PB許可隻数 : 1隻

○忍路漁港(第1種漁港 昭和26年10月17日指定)

- 管理者 : 北海道(昭和30年4月14日告示)
主な漁業 : 刺し網、定置、タコ縄、ウニ・アワビなどの採介藻漁業
水揚量 : 377トン
水揚金額 : 2.7億円
登録漁船数 : 66隻

3 漁業権区域

区分	漁業権許可番号	漁業権の種類
単有	後海共	11 第1種共同漁業権（タコ及びシヤコを除く）
		32 第1種共同漁業権（タコ）
		34 第1種共同漁業権（シヤコ）
		33 第2種・第3種共同漁業権（第3種つきいそを除く）
共有	石後海共	1 第1種共同漁業権（タコ）
		2 第2種共同漁業権
区画	小樽海区	1 第1種区画漁業（ホタテガイ養殖業）



(1) 漁業権の定義・・・漁業法より

「漁業権」とは、定置漁業権、区画漁業権及び共同漁業権をいう。

- 「定置漁業権」とは、定置漁業を営む権利。

「定置漁業」とは、漁具を定置して営む漁業

- 「区画漁業権」とは、区画漁業を営む権利。

「区画漁業」とは、一定の区域内において営む養殖業

- 「共同漁業権」とは、共同漁業を営む権利をいう。

「共同漁業」とは、一定の水面を共同に利用して営む漁業

第一種共同漁業 藻類、貝類又は農林水産大臣の指定する定着性の水産動物を
目的とする漁業

第二種共同漁業 網漁具（えりやな類を含む。）を移動しないように敷設して
営む漁業であって定置漁業及び第五種共同漁業に掲げるもの
以外のもの

第三種共同漁業 地びき網漁業、地こぎ網漁業、船びき網漁業（動力漁船を使用
するものを除く。）、飼付漁業又はつきいそ漁業（第一種
共同漁業に掲げるものを除く。）であって、第五種共同漁業
に掲げるもの以外のもの

第四種共同漁業 寄魚漁業又は鳥付こぎ釣漁業であって、第五種共同漁業以外
のもの

第五種共同漁業 内水面（農林水産大臣の指定する湖沼を除く。）又は農林水
産大臣の指定する湖沼に準ずる海面において営む漁業であっ
て第一種共同漁業に掲げるもの以外のもの

4 漁業生産状況

(1) 漁獲量及び漁獲金額等の状況

令和6年の小樽市の漁業生産高は約2.2万トンと直近4年間は横ばいとなっています。昨年と比べ、スケトウタラの漁獲量がともに6千トンを超える豊漁です。過去5年間の漁獲金額は、令和5年に40億円を突破し、令和6年は39億円となり、僅かに40億円には届きませんでした。(図-2)

一方、全道をみますと、令和6年速報値では漁業生産高が、イワシや、サケが減少する一方で、サンマが増加し、7年連続で100万トンを超える見込みです。漁獲金額は、ホタテガイやイワシの減少したものの、サケが増加し、前年より減少するが、過去5箇年平均を上回る見込みです。(図-3)

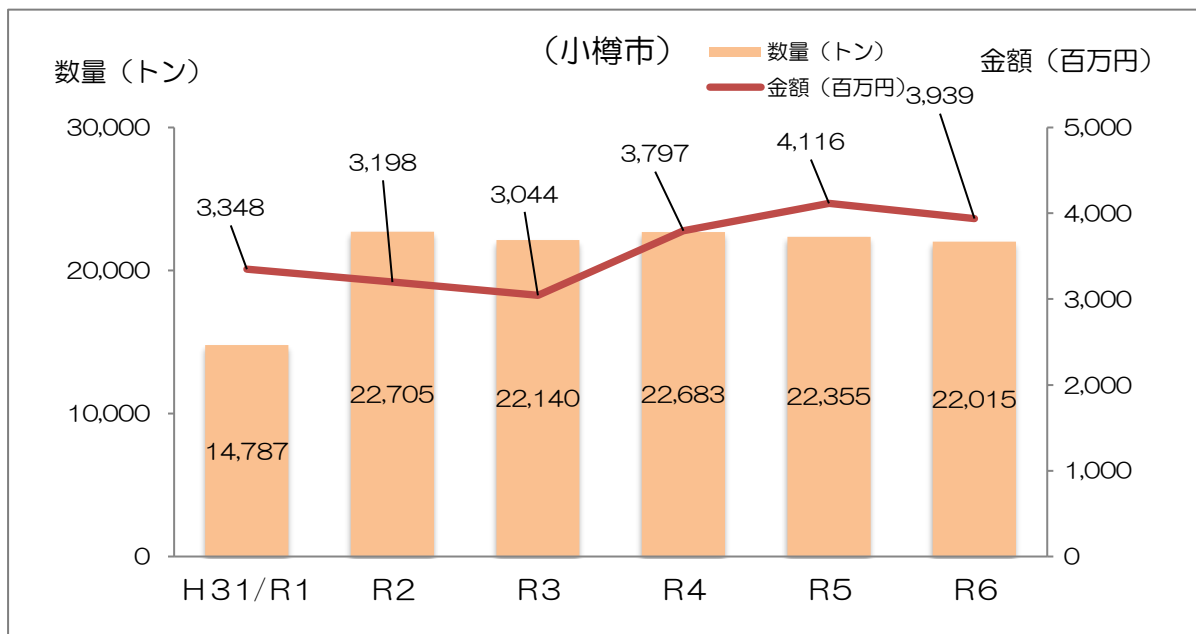


図-2 小樽市の漁業生産高の推移【直近6年間】

(資料：小樽市統計書)

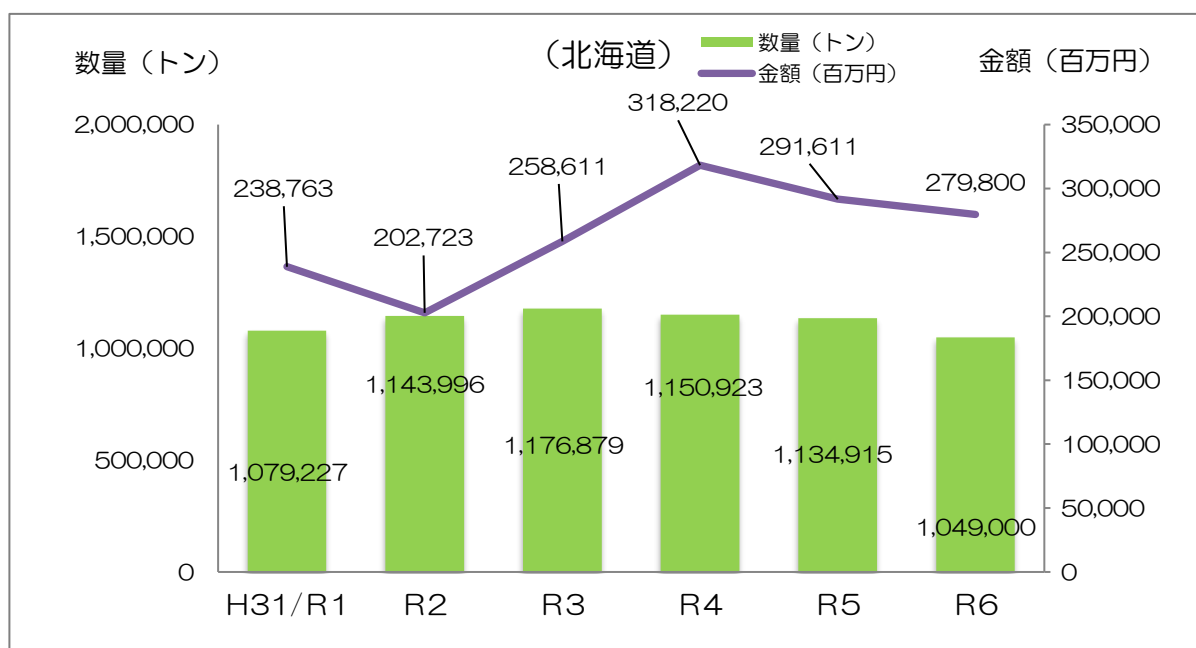


図-3 北海道の漁業生産高の推移【直近6年間】

(資料：北海道水産現勢、R6は速報値)

令和6年の漁業種別取扱金額の上位をみますと、小樽市漁協ではほたてがい養殖業漁業が沖合底びき網漁業、うに漁業を抑えて、継続して安定の1位になっています。(表-1)

また、小樽機船漁協では沖合底びき網漁業が、数量で13,132トン、金額で約14億円となっています。(表-2)

漁業種類		数量(トン)	金額(百万円)※税抜	
区画	ほたてがい養殖業漁業	1,263	456	①
大臣許可	沖合底びき網漁業	4,575	443	②
共同	うに漁業	13	319	③
共同	にしん刺し網漁業	815	213	④
共同	しゃこ漁業	57	168	⑤
共同	なまこ漁業	26	100	⑥
共同	たこ箱漁業	125	98	⑦
知事許可	ずわいかにかご漁業	483	95	⑧
定置	さけ定置網漁業	76	80	⑨
共同	かれい刺し網漁業	215	56	⑩

表-1 令和6年の金額上位の生産高(資料:小樽市漁協業務報告書)

漁業種類		数量(トン)	金額(百万円)※税抜	
大臣許可	沖合底びき網漁業	13,132	1,382	①

表-2 令和6年の金額上位の生産高(資料:小樽機船漁協業務報告書)

令和6年の魚種別漁獲量では、スケトウタラが全体の32%を占め、順にホッケ26%、タラ17%、カレイ9%、ホタテ稚貝6%、ニシン4%、カニ3%、タコ1%で、その他が2%を占めています。(図-4)

また、魚種別漁獲金額では、タラが16.0%、ホタテ稚貝が12.4%、ホッケ11.6%、スケトウタラ11.2%、ウニ8.7%、ニシン6.0%、カレイ5.8%、タコ5.2%、シャコ4.6%、カニ4.4%、ナマコ2.8%で、その他が11.2%を占めています。(図-5)

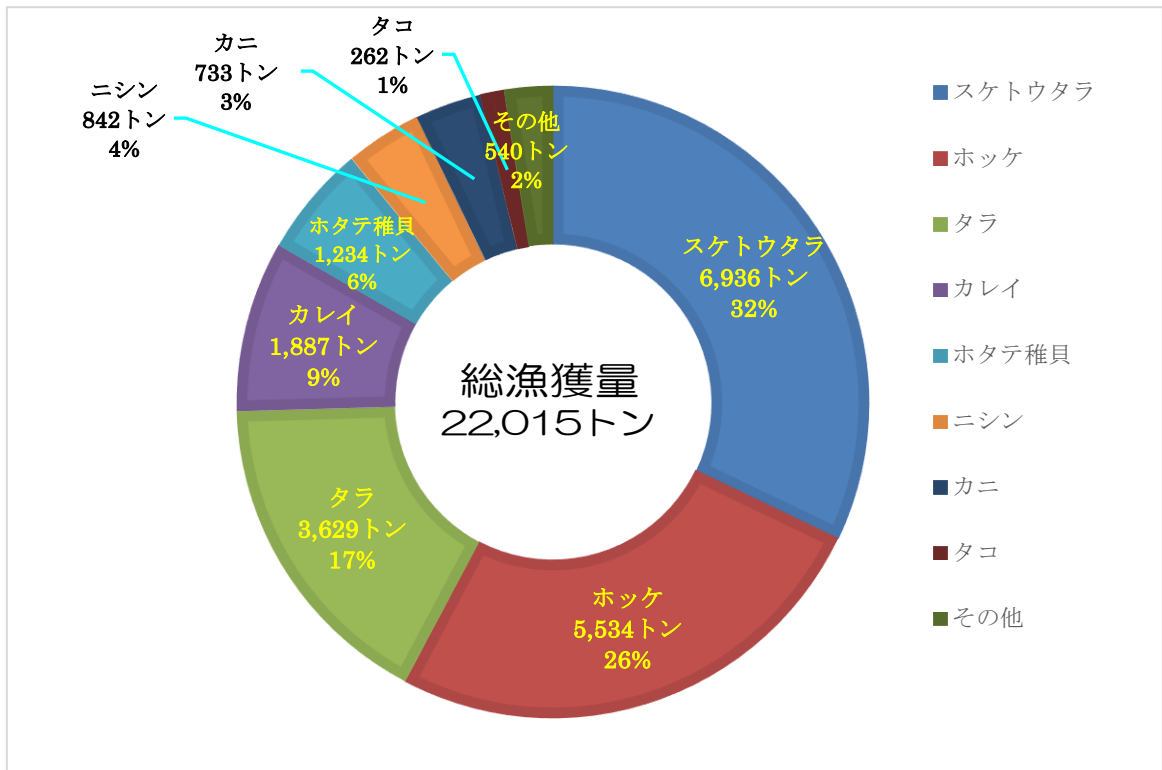


図-4 令和6年の魚種別漁獲量 (資料：小樽市統計書)

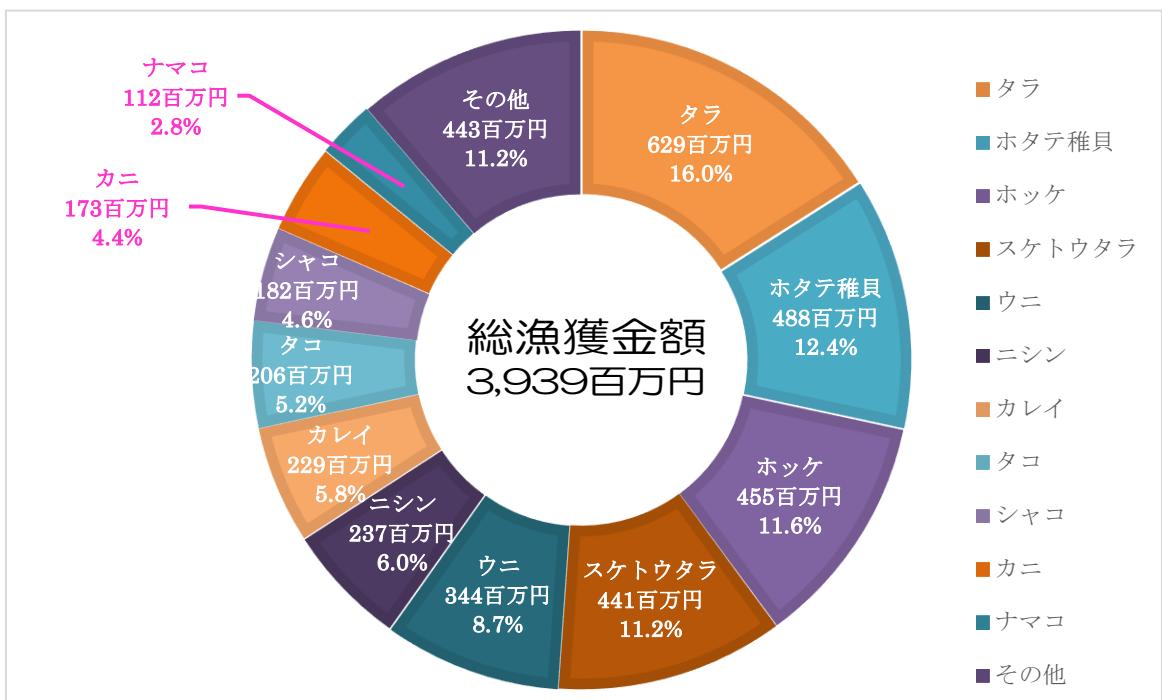


図-5 令和6年の魚種別漁獲金額 (資料：小樽市統計書)

昭和50年以降の経過を見ると、近年は漁獲高・漁獲金額ともに横ばい傾向となっていますが、漁獲高では、最高値であった昭和50年と比較すると令和6年は70%減であり、漁獲金額では、最高値であった平成3年と比較すると64%減となっています。(図-6)

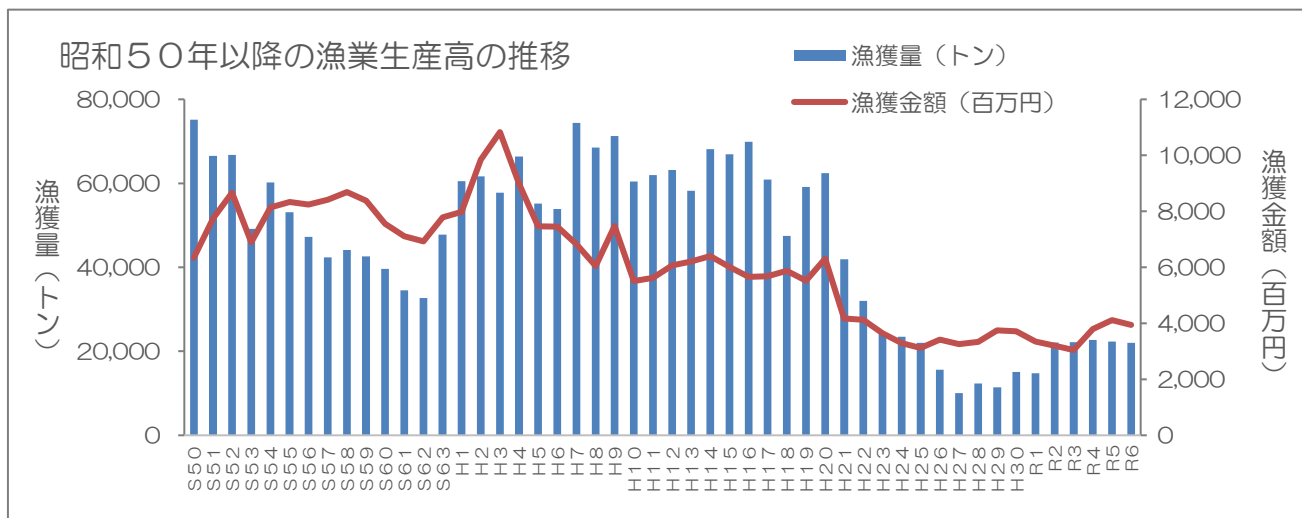


図-6 昭和50年以降の漁業生産高の推移 (資料：小樽市統計書)

(2) 主な漁業種類の生産状況

1) 沖合底びき網漁業

小樽市の沖合底びき網漁業は、日本海北海道沖武蔵堆付近を中心漁場とし、スケトウダラ、ホッケ、カレイ類等を漁獲しています。漁獲量は、直近では1.8万トン前後で推移しています。

漁獲金額は、近年10億円台の横ばい傾向でしたが、令和5年、令和6年は20億円近くに増加しました。(図-7)

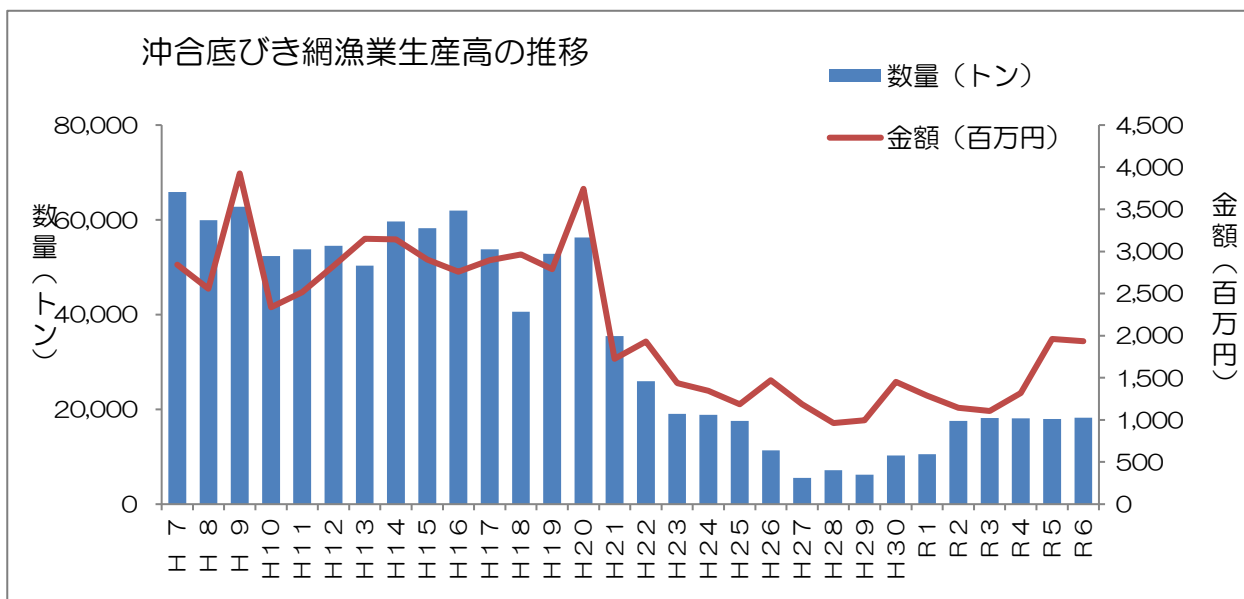


図-7 沖合底びき漁業の推移 (資料：小樽市統計書)

2) サケ定置網漁業（サケ）

令和6年は過去5箇年平均と比べて67%減の76トンと大幅に減少しました。

漁獲金額は、過去5箇年平均と比べて50%減の0.9億円で、漁獲量と同様に大幅な減少となりました。（図-8）

また、サケやサクラマスは資源維持等のため平成16年（サクラマスは平成20年）から継続して稚魚の放流事業を行っています。（表-3）

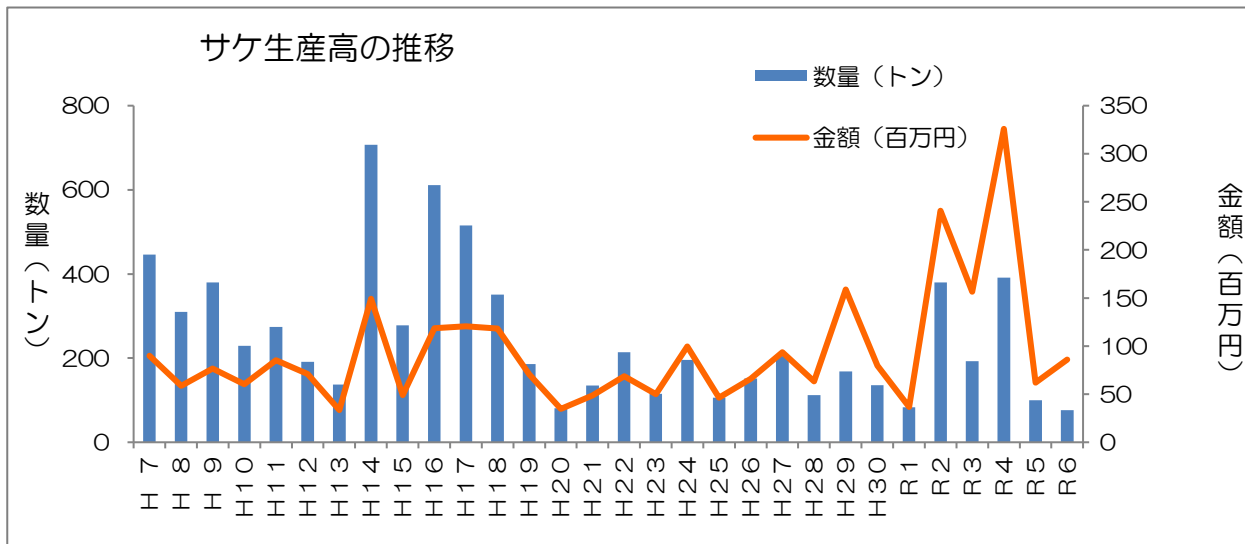


図-8 サケ生産高の推移（資料：小樽市統計書）

サケ稚魚放流実績

放流年	放流量
H30	600,000尾
R1	600,000尾
R2	600,000尾
R3	600,000尾
R4	600,000尾
R5	600,000尾
R6	600,000尾

サクラマス稚魚放流実績

放流年	放流量
H30	0尾
R1	20,000尾
R2	20,000尾
R3	20,000尾
R4	10,000尾
R5	10,000尾
R6	10,000尾

表-3 サケ・サクラマス稚魚放流の直近7年間の実績（資料：小樽市漁協より報告）

3) ニシン刺し網漁業（ニシン）

現在漁獲されているニシンは、明治から大正にかけて大量に漁獲があった北海道サハリン系群ではなく、石狩湾周辺を回遊している石狩湾系群となっております。1月～3月頃に産卵のため沿岸に近づくニシンを刺し網により漁獲しています。

北海道日本海側のニシン漁獲量は、長年低い水準で推移していたため、北海道は日本海地域の漁業振興対策の一環として、ニシン資源の増大を図るため、平成8年度から19年度まで「日本海ニシン資源増大推進プロジェクト」により、ニシンの種苗生産や放流を実施してきました。

平成20年度以降は、生産技術の向上により、事業の安定化が図られたことから「日本海北部ニシン栽培漁業推進委員会」を設置し、種苗生産事業を現在も実施しています。

小樽沿岸では、平成15年からニシン稚魚の放流を毎年実施しており、漁獲高・漁獲金額には波があるものの平成9年以前の低水準からは回復しています。令和6年の漁獲量については、過去5箇年平均と比べて32%増の842トンで、漁獲金額は過去5箇年平均と比べて34%増の2.4億円となりました。

(図-9) (表-4)

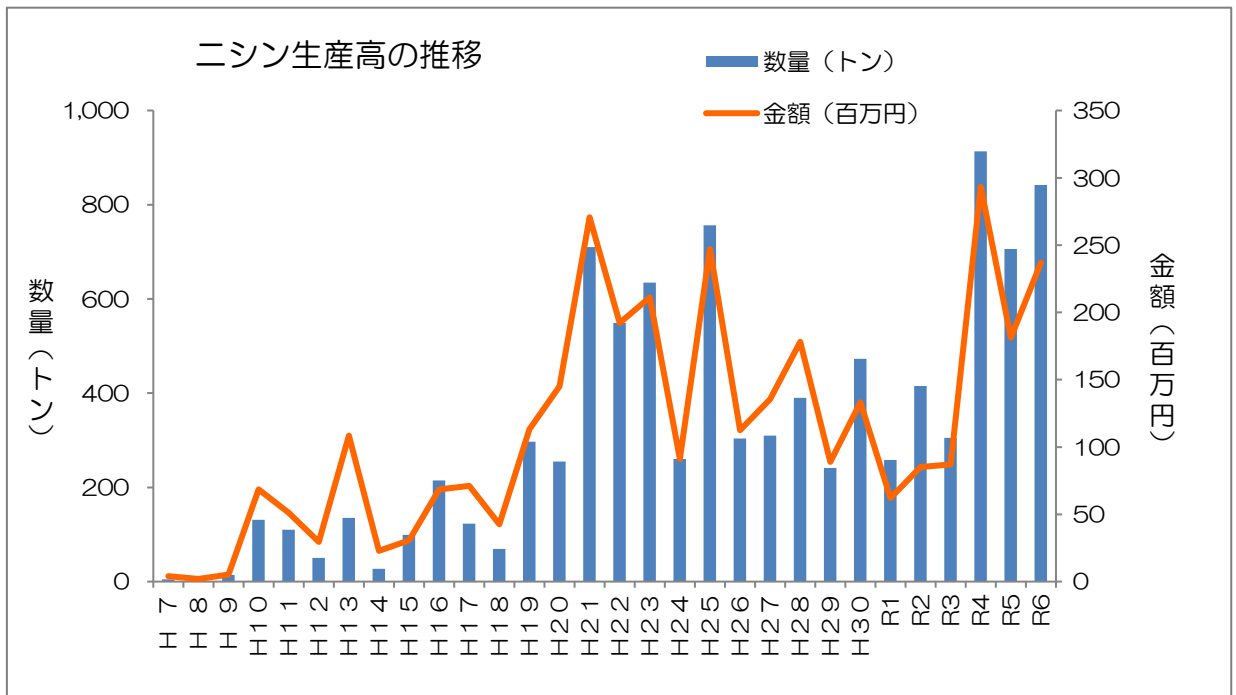


図-9 ニシン生産高の推移 (資料：小樽市統計書)

放流年	放流量
H29	147,000尾
H30	147,000尾
R1	147,000尾
R2	147,000尾
R3	147,000尾
R4	147,000尾
R5	147,000尾
R6	147,000尾

表-4 ニシン稚魚放流の直近7年間の実績 (資料：小樽市漁協より報告)

4) ホタテガイ養殖漁業（ホタテガイ）

小樽沿岸のホタテガイ養殖漁業は、祝津地区に区画漁業権を設定して養殖施設を配置し、成員、稚貝の養殖を行っています。

成員については、昭和57年の養殖開始当初は成員を主として生産していましたが、現在は稚貝生産を主としているため、漁獲量・漁獲金額ともに減少しています。（図-10）

稚貝については、平成12年にオホーツクや道東方面からの稚貝需要の高まりから、ホタテの主生産を稚貝に切り替えました。以降、漁獲量は、年ごとの増減がありながら近年は2,000トン台で推移していましたが、令和6年は、前年比45%減少の1,234トンとなりました。

漁獲金額は、おおむね漁獲量とほぼ比例しており、令和6年は4.9億円でした。

（図-11）

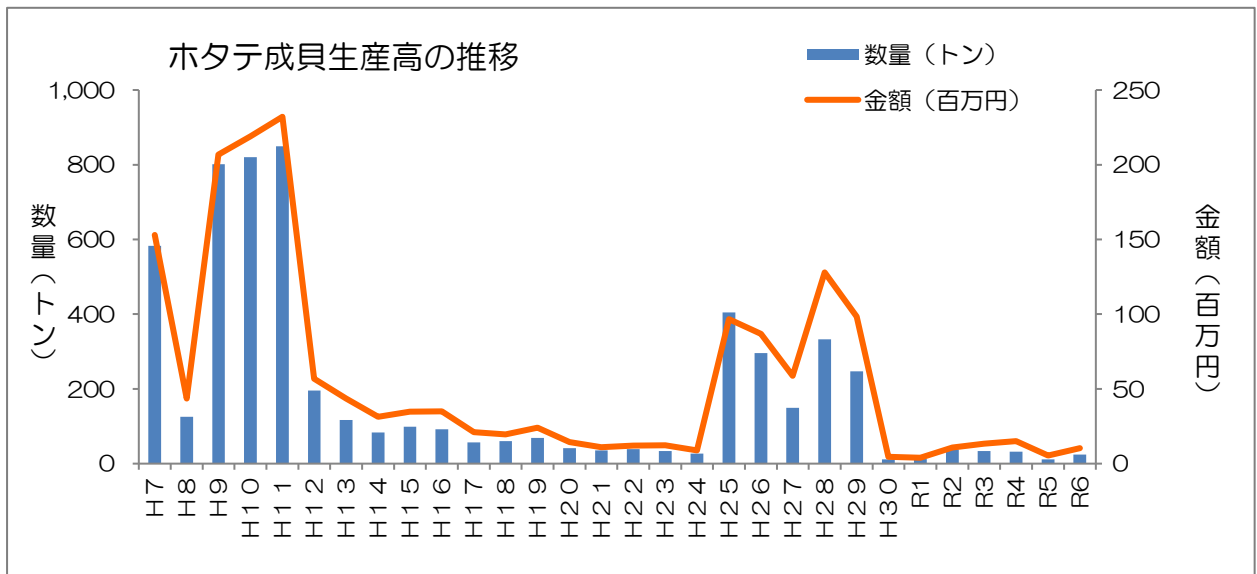


図-10 ホタテ成員生産高の推移（資料：小樽市統計書）

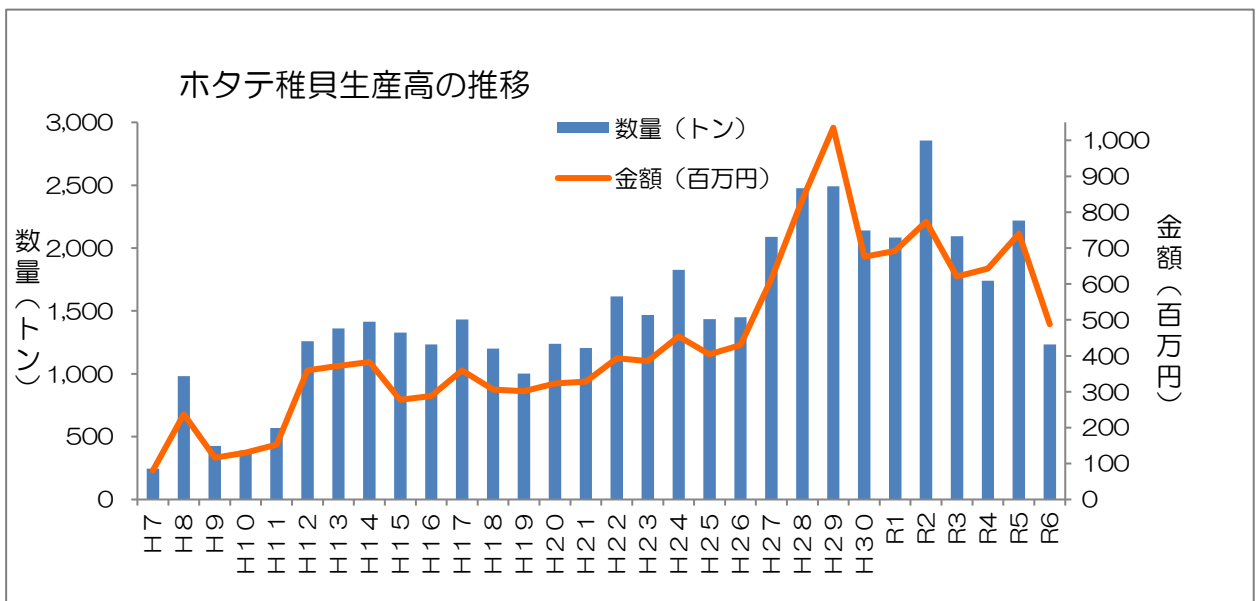


図-11 ホタテ稚貝生産高の推移（資料：小樽市統計書）

5) ナマコ漁業（ナマコ）

北海道産の乾燥ナマコは、中国で高級食材とされているため、需要が大幅に伸び、平成15年から漁獲量が増大しました。近年は20トンから30トン前後で推移しており、令和6年は27トンとなっています。

漁獲金額は、令和2年に1億円を割ったもののその後回復し、令和6年は1.1億円とまりました。（図-12）

また、平成27年からマナマコの種苗生産試験や放流を行っており、これまでの試験・研究の結果を生かした、本格的な種苗生産の実施を目指しています。

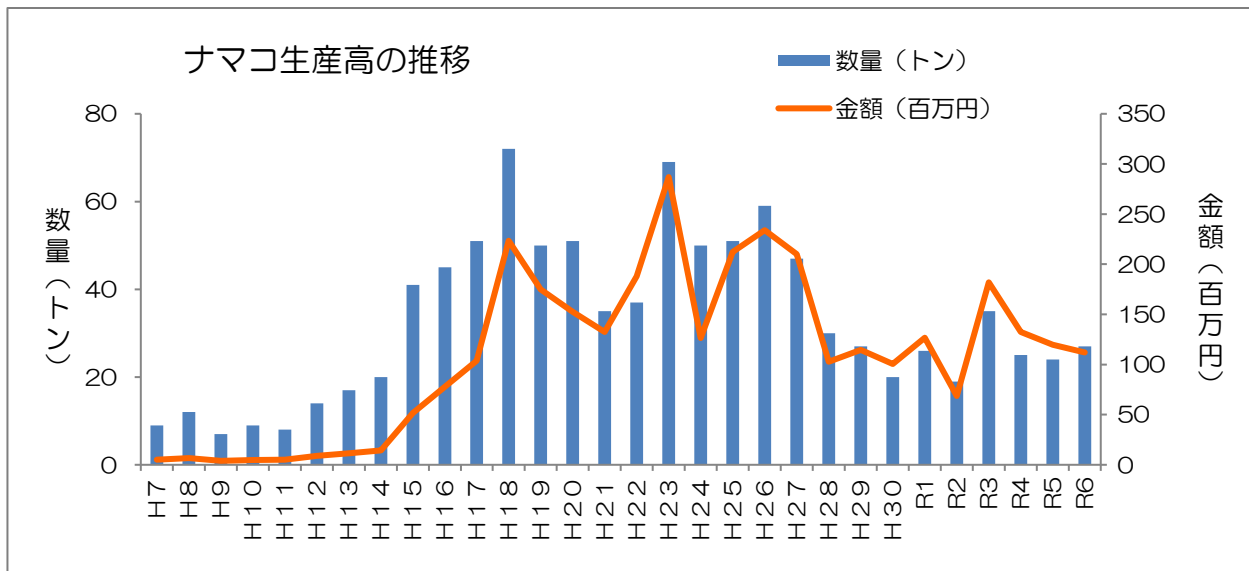


図-12 ナマコ生産高の推移（資料：小樽市統計書）

6) シャコ漁業（シャコ）

小樽沿岸のシャコの漁期は、春4月～6月、秋10月～12月に小樽港沖の水深10m～30mに刺し網を仕掛けて行っており、また、産卵期は春から初夏となっています。

漁獲量は、令和6年は57トンで増加傾向でした。

漁獲金額については、令和6年は1.8億円でやや増加となりました。（図-13）

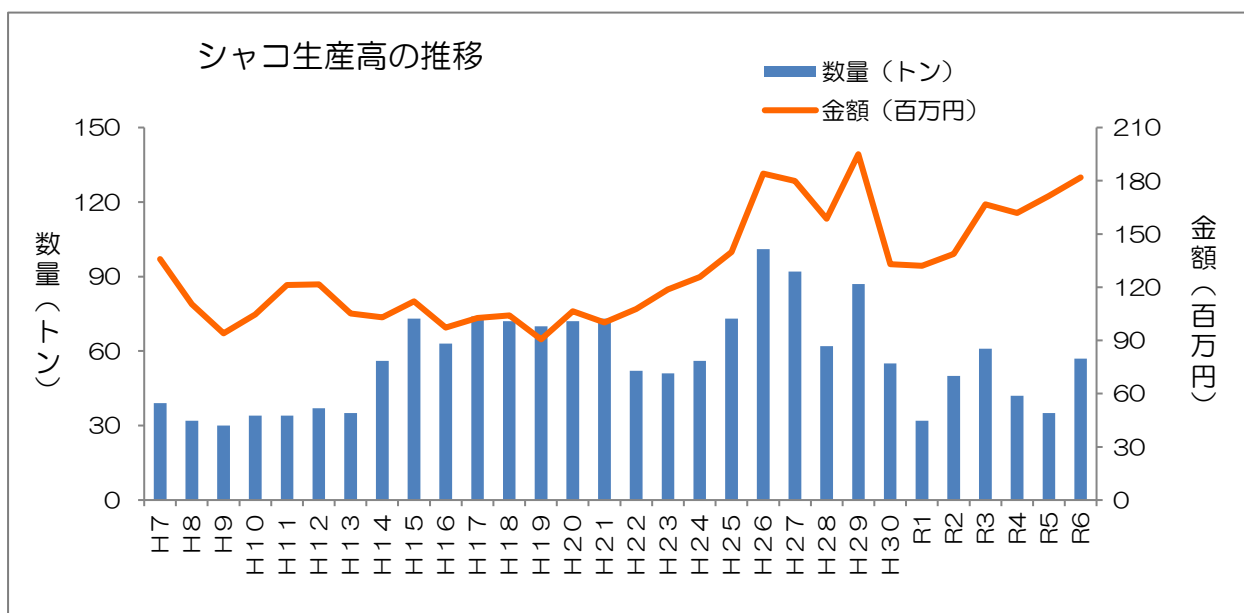


図-13 シャコ生産高の推移（資料：小樽市統計書）

7) 採介藻漁業（ウニ、アワビ）

小樽市の採介藻漁業は、全地域で行われています。令和6年末の経営体数（漁業を営む世帯又は事業所）は、ウニが85経営体、アワビが81経営体となっています。

ウニ漁の令和6年の漁獲量は、前年より1トン減少の13トンで、漁獲金額は前年比11%減の3.4億円となっています。（図-14）

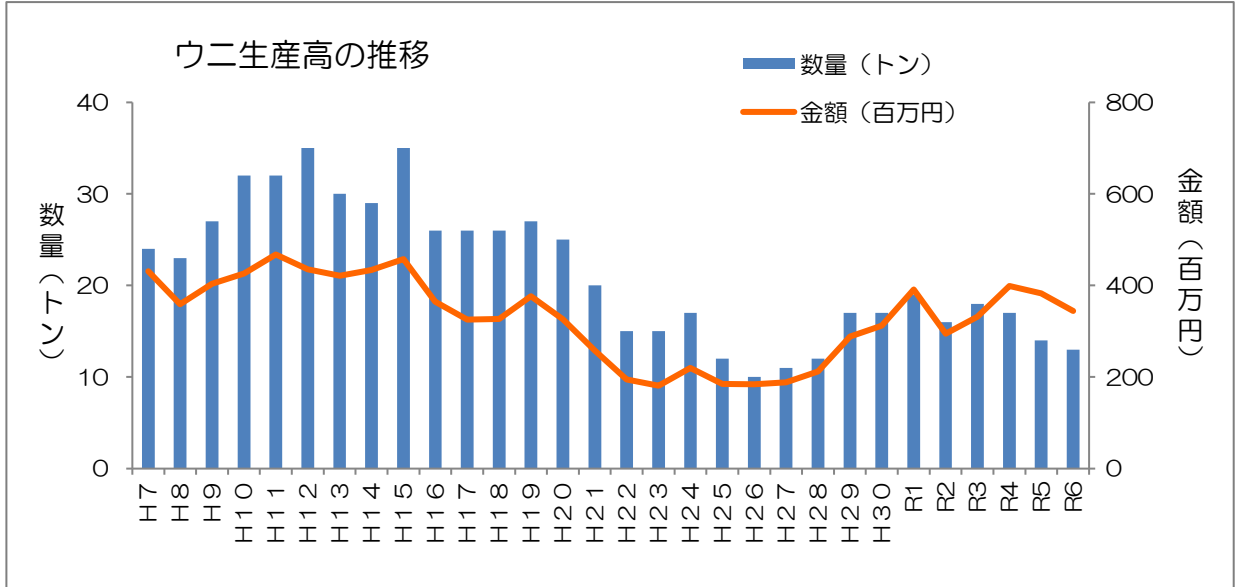


図-14 ウニ生産高の推移（資料：小樽市統計書）

アワビの漁獲量は、令和6年の漁獲量は前年同量

の3トンとなっています。漁獲金額は前年と同額の1.7億円となっています。（図-15）

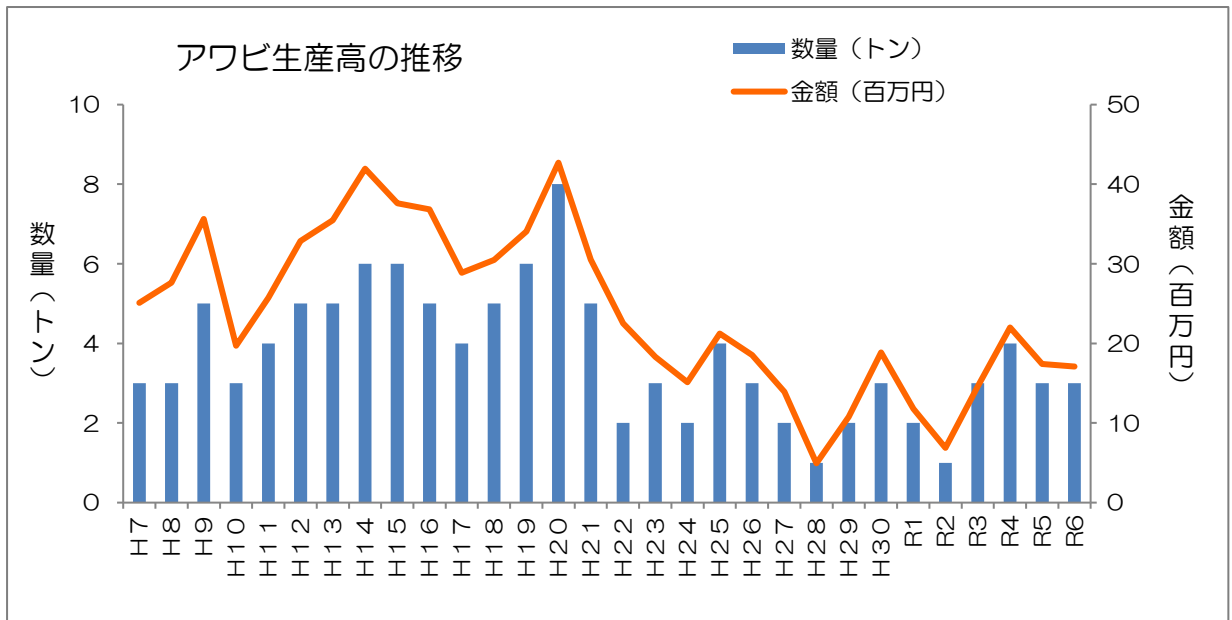


図-15 アワビ生産高の推移（資料：小樽市統計書）

また、ウニやアワビは、資源の維持・増大を図るべく、平成16年から種苗放流を行っています。(表-5)

ウニ種苗放流実績		アワビ種苗放流実績	
放流年	放流量	放流年	放流量
H30	386,500粒	H30	31,500粒
R1	451,000粒	R1	24,000粒
R2	432,000粒	R2	0粒
R3	431,000粒	R3	30,000粒
R4	508,500粒	R4	43,000粒
R5	541,500粒	R5	0粒
R6	529,000粒	R6	0粒

表-5 ウニ・アワビ種苗放流実績 (資料：小樽市漁協より報告)

※アワビについて、令和2年、令和5年、令和6年は種苗がウイルスに感染し出荷停止のため実績なし

5 漁業協同組合概要

小樽市には、沿岸漁業を主とする小樽市漁業協同組合と沖合底びき網漁業を主とする小樽機船漁業協同組合があります。

小樽市漁業協同組合は、昭和24年9月24日に漁業者、漁業従事者、加工業者1,024人（正組合員895人、准組合員129人）をもって設立。小樽漁業会より財産と業務一切を受け継いで同年10月1日から業務を開始しています。また、昭和41年11月1日に忍路漁業協同組合と合併しています。

小樽機船漁業協同組合は、昭和24年7月19日に小樽機船底曳網漁業協同組合として底びき網漁業者、漁業従事者40人（正組合員40人、准組合員0人）をもって設立し、昭和35年8月16日に改称し、現在に至っています。

○小樽市漁業協同組合（令和6年12月31日現在）

代表理事組合長	嶋 秀樹（平成26年1月5日新任）
専務理事	三浦 弘（令和4年3月31日新任）
職員数	18名

○小樽機船漁業協同組合（令和6年6月30日現在）

代表理事組合長	伊藤 保夫（平成24年6月13日新任）
専務理事	伊吹 勇晴（令和元年10月1日新任）
職員数	13名（他に乗組員 15名）

(1) 漁協組合員数

小樽市漁協の組合員数は、令和6年末で139名であり、昨年から1名減少しました。

(図-16)

小樽機船漁協の組合員数は、令和6年6月末時点で29名であり、昨年から2名増加しました。(図-17)

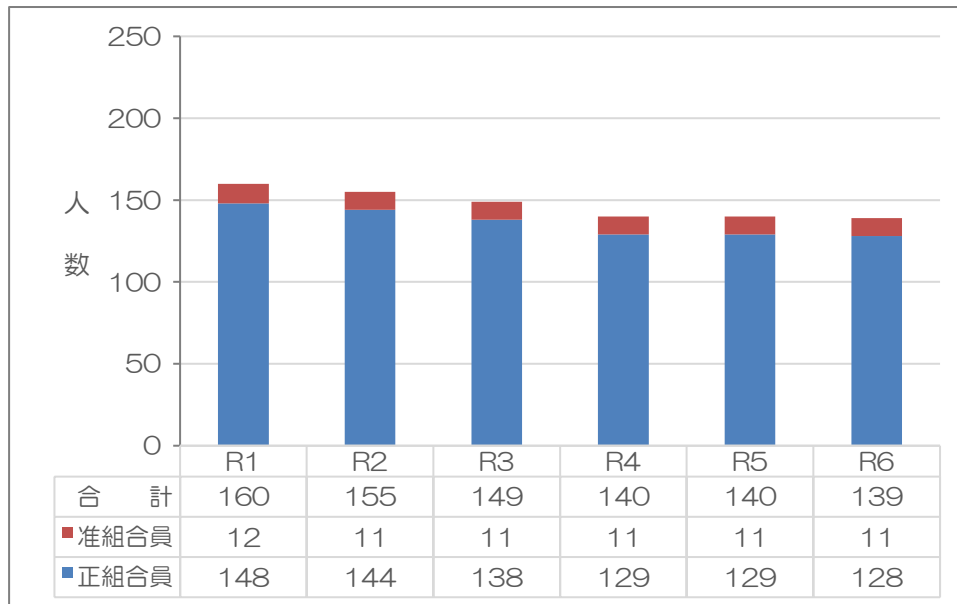


図-16 小樽市漁協組合員数の推移 (資料：小樽市漁協業務報告書)

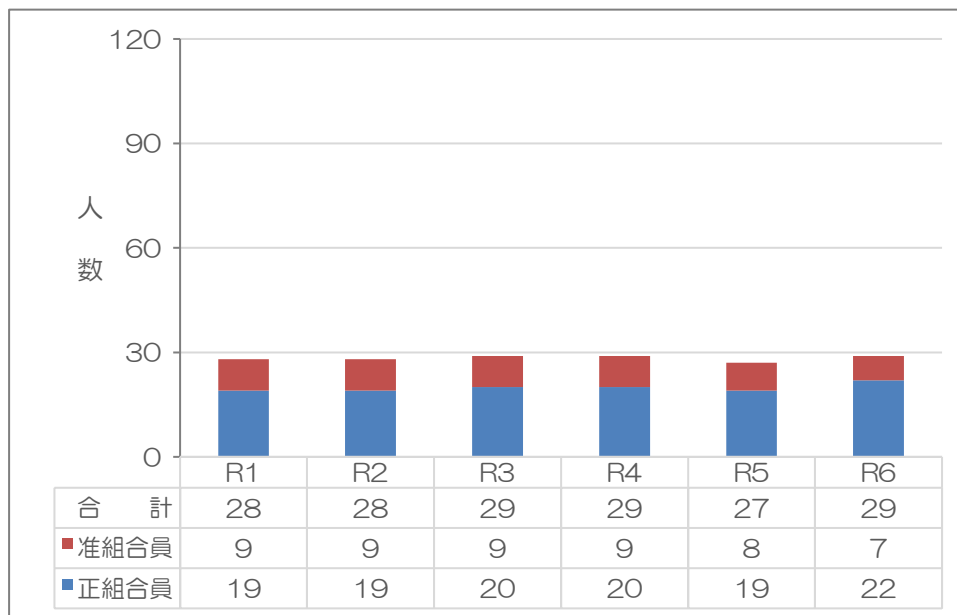


図-17 小樽機船漁協組合員数の推移 (資料：小樽機船漁協業務報告書)

(2) 漁船隻数

小樽市漁協所属の漁船隻数は、令和6年は238隻で、昨年より3隻減少となっています。

トン数別で見ますと、船外機船が全体の約86%を占めて圧倒的に多く、続いて3～5t未満船で全体の約8%を占めています。(図-18)

小樽機船漁協所属の漁船隻数は、令和6年6月末時点で12隻と、昨年より1隻減少し、うち11隻が20t以上の漁船です。(図-19)

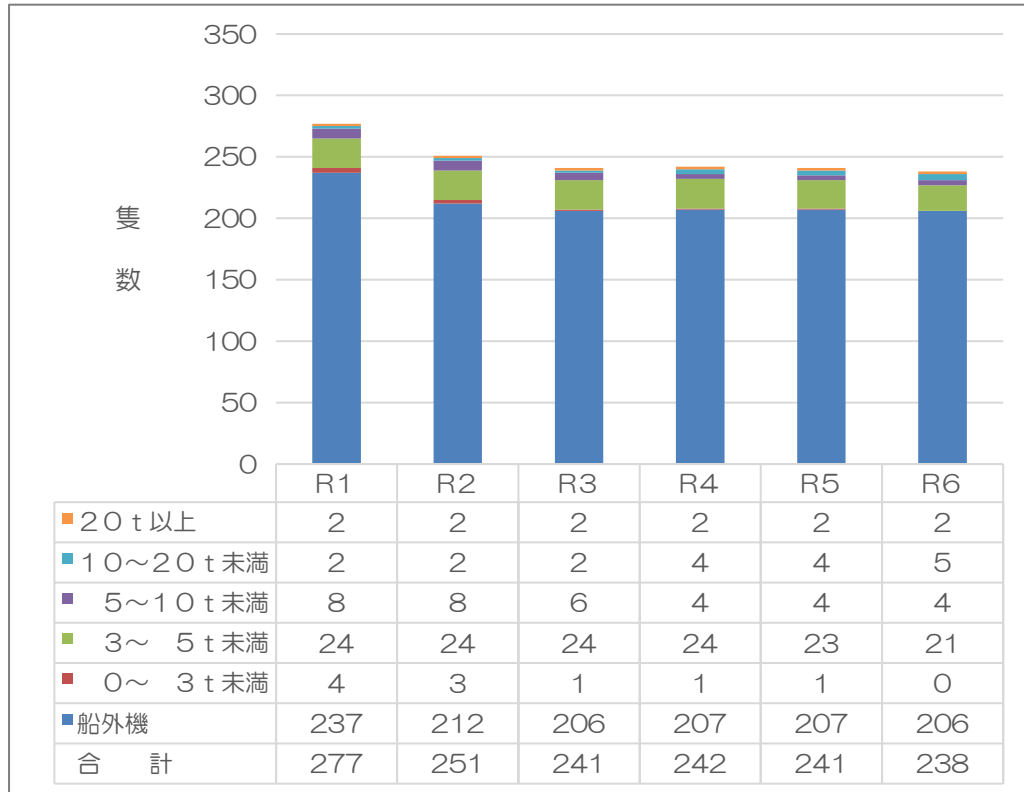


図-18 小樽市漁協の漁船トン数別隻数の推移 (資料：小樽市漁協業務報告書)

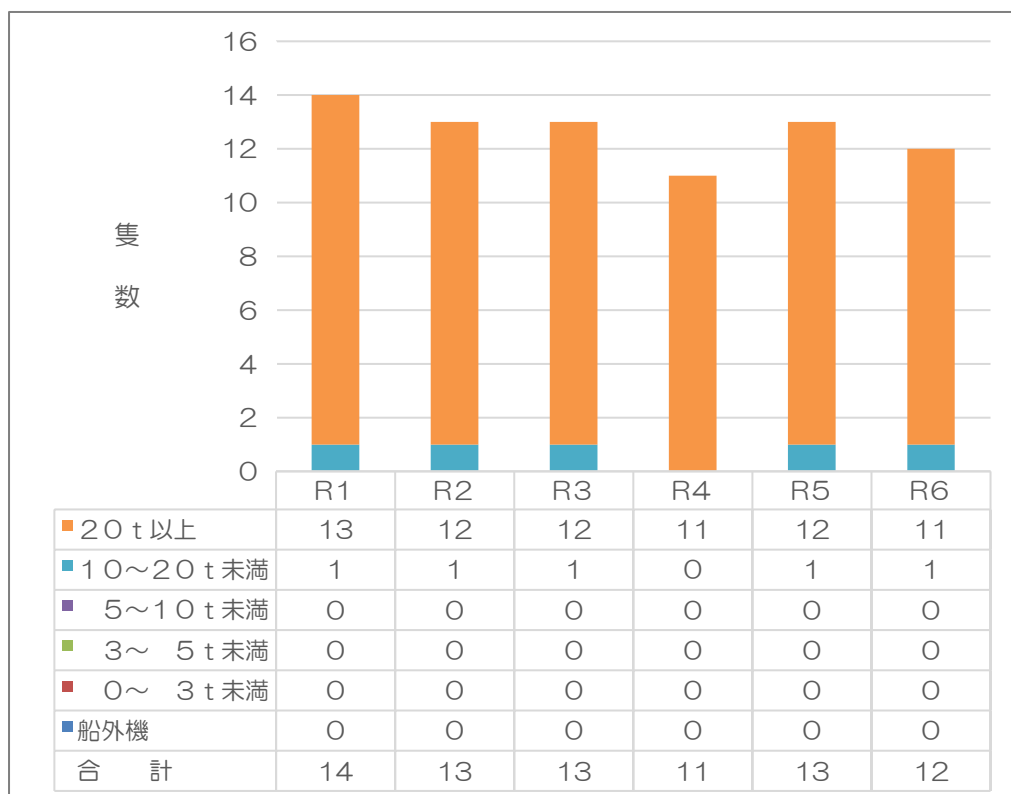


図-19 小樽機船漁協の漁船トン数別隻数の推移 (資料：小樽機船漁協業務報告書)

(3) 漁業種類別経営体数

小樽市漁協の漁業種類別経営体数は、タコいさり漁業、ナマコ漁業が96経営体と最も多く、次いでカレイ刺し網漁業90経営体、ツブ漁業87経営体となっています。

また、生産額の多い漁業種類として、ホタテガイ養殖漁業が6経営体、次いで沖合底びき網漁業1経営体、ウニ漁業85経営体、ニシン刺し網漁業75経営体、シャコ漁業58経営体となっています。(図-20)

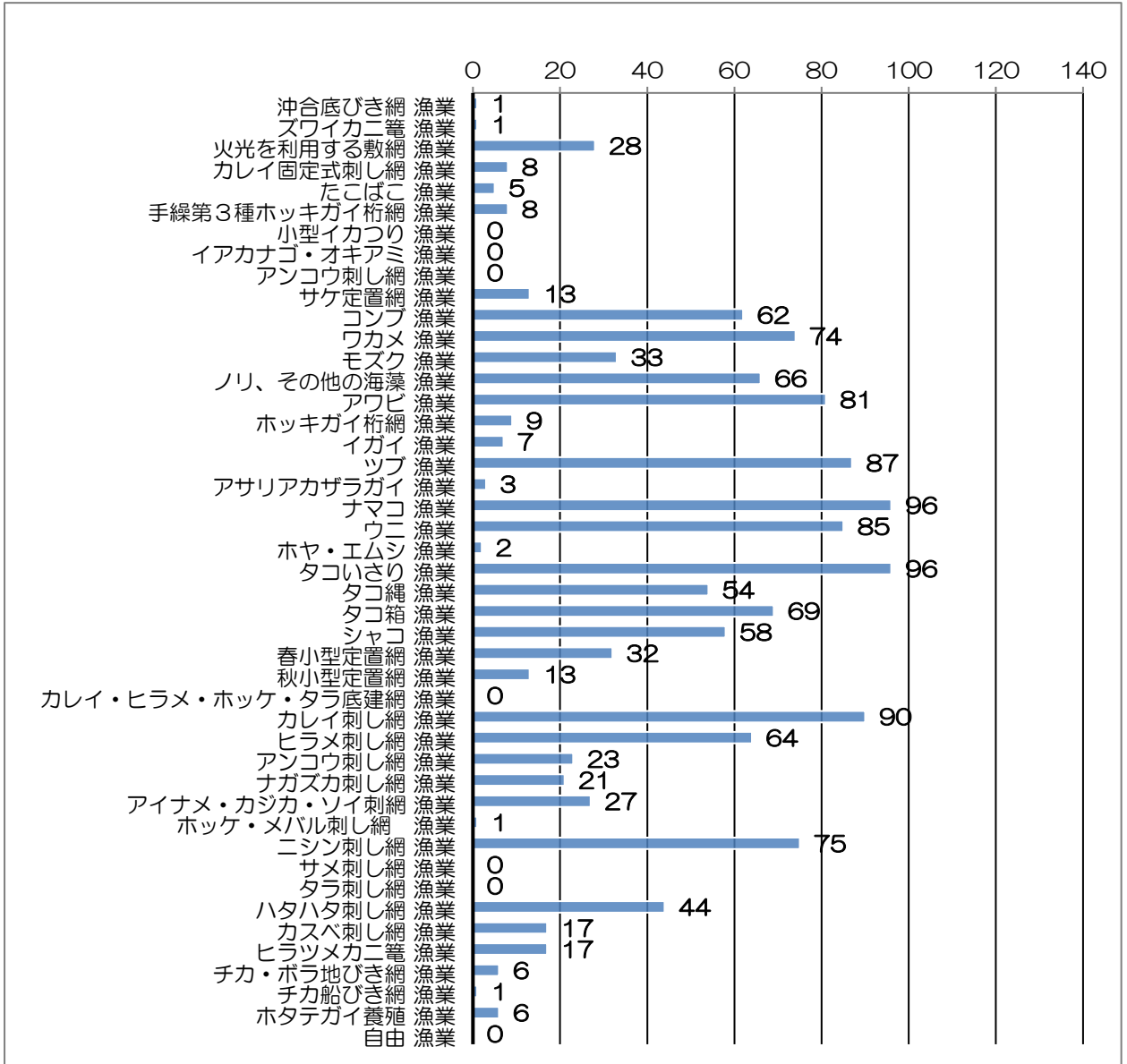


図-20 小樽市漁協の漁業種類別経営体数 (資料: 小樽市漁協業務報告書)

小樽機船漁協の漁業種類別経営体数は、沖合底びき網漁業が9経営体と最も多くなっています。(図-21)

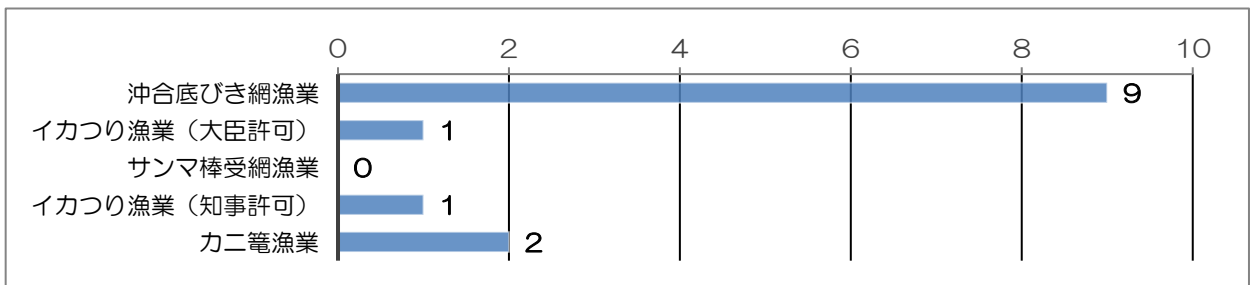


図-21 小樽機船漁協の漁業種類別経営体数 (資料: 小樽機船漁協業務報告書)

(4) 漁獲金額別経営体数

漁業センサス（5年ごとに行なわれる調査）による漁獲金額別の経営体数の比率をみますと、500万円未満の経営体数は、令和5年は25%となっています。

また、1,000万円以上の経営体数は、令和5年は53%となりました。（図-22）

令和5年の全道との比較では、500万円未満の比率は全道を下回っていますが、1,000万円以上の経営体数の比率は全道を上回りました。（図-23）

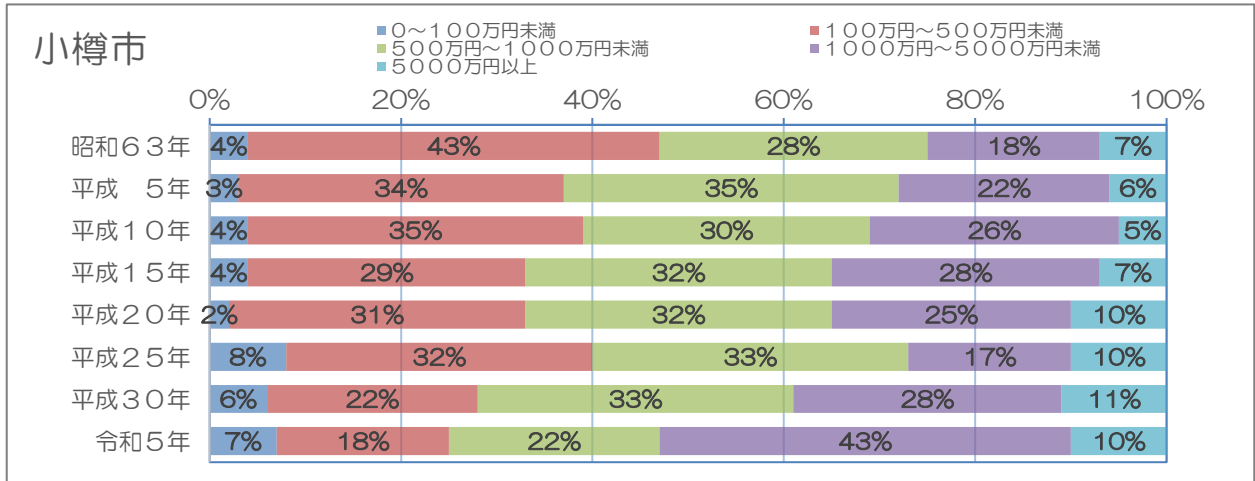


図-22 小樽市の漁獲金額別漁業経営体数比率の推移（資料：漁業センサス）

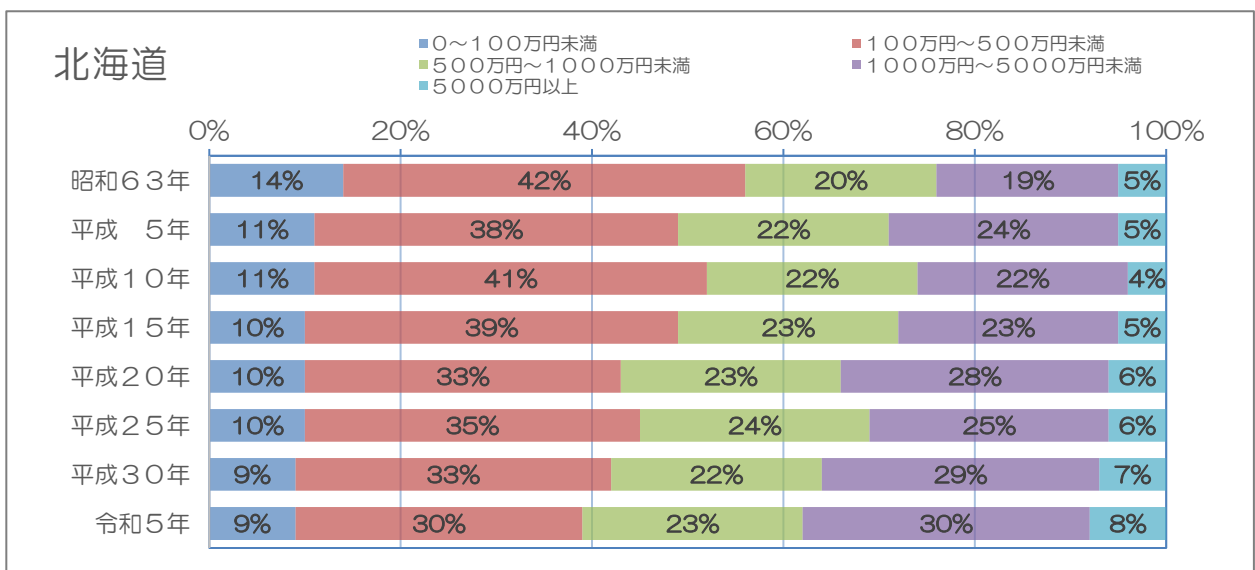


図-23 北海道の漁獲金額別漁業経営体数比率の推移（資料：漁業センサス）

(5) 年齢別漁業就業者数

漁業者の年齢構成をみますと、65歳以上の就業者が年々比率を上げ、令和5年は43%になりました。また、39歳以下の就業者比率は、令和5年は20%になっています。

(図-24) (図-26)

令和5年の全道との対比をみますと、65歳以上の就業者比率は14ポイント上回っており、39歳以下の就業者比率は3ポイント下回る比率となっています。(図-25)

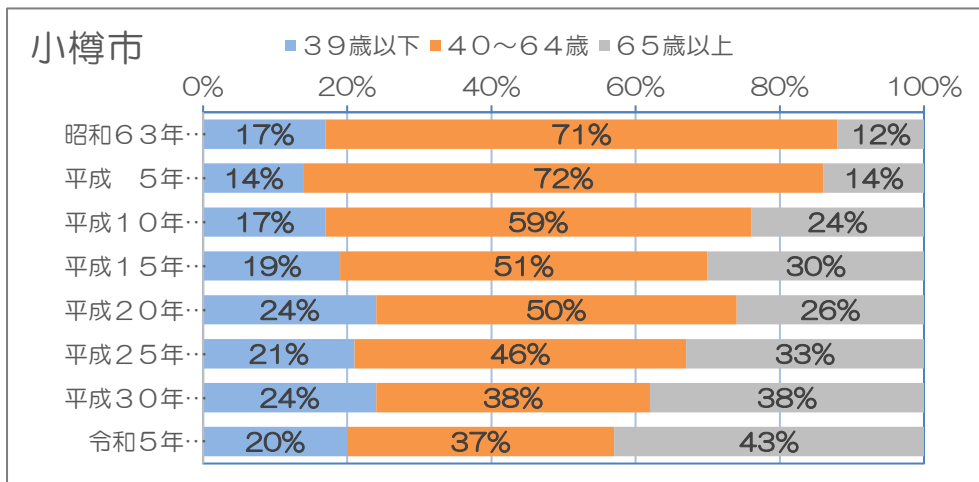


図-24 小樽市の年齢別漁業就業者数比率の推移 (資料：漁業センサス)

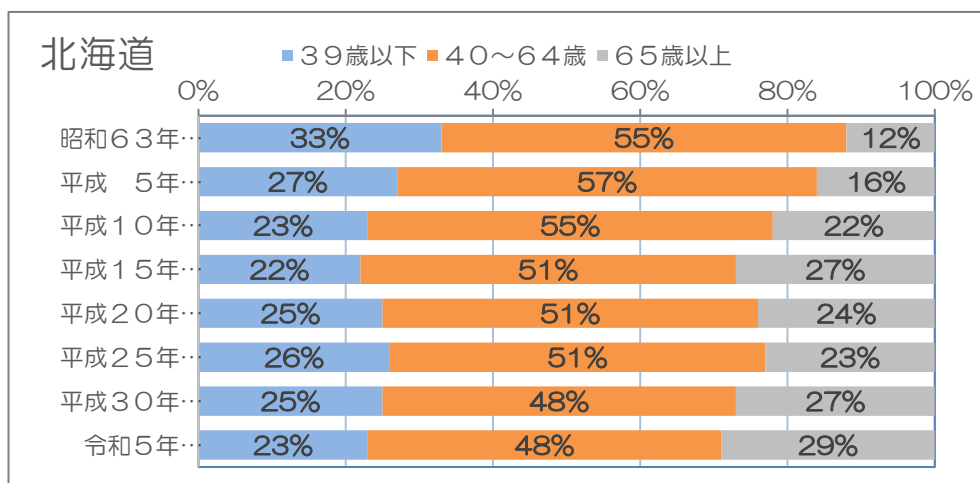


図-25 北海道の年齢別漁業就業者数比率の推移 (資料：漁業センサス)

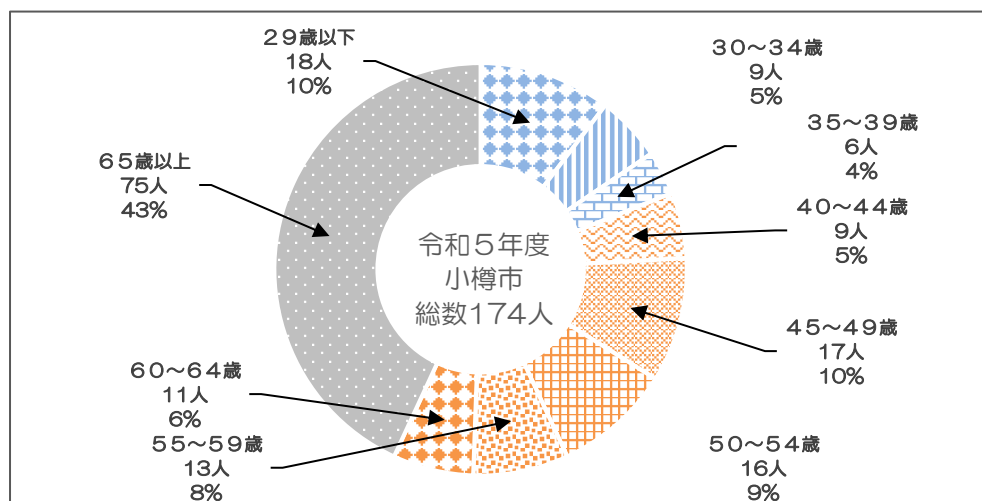


図-26 小樽市の年齢別漁業就業者数比率 (資料：令和5年漁業センサス)

(6) 安全操業対策

小樽市及び北海道内において発生している海難事故の状況（表－6）

区 分	北 海 道			小 樽 市		
	出動回数	死亡	行方不明	出動回数	死亡	行方不明
R1	21	8	2	1	1	0
R2	18	4	3	0	0	0
R3	19	4	2	1	0	0
R4	28	4	28	0	0	0
R5	12	0	3	1	0	0
R6	11	3	0	0	0	0

表－6 海難事故発生状況（資料：（公社）北海道漁船海難防止・水難救済センター）

※北海道の令和4年の行方不明者大幅増加は、知床観光船沈没事故（26件）のため